

【書評・紹介】

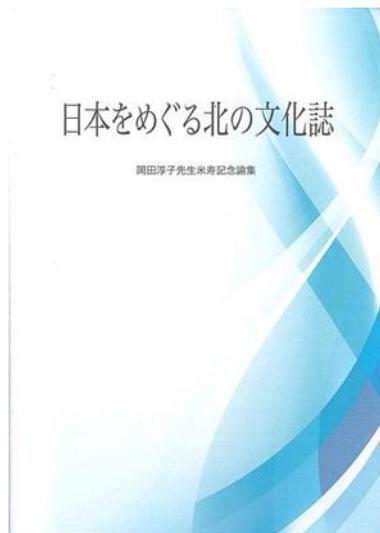
『日本をめぐる北の文化誌 岡田淳子先生米寿記念論集』

(網走, 岡田淳子先生米寿記念論集編集委員会 編集・発行, 2020 年 2 月, B5 版, 416 頁, 税別 4,480 円)

津 曲 敏 郎

当会顧問の岡田淳子先生には、2020 年 2 月に 88 歳の米寿を迎えられた。本書は、国内やアラスカでの考古学・人類学調査研究等でかかわりのあった人たちが、北海道東海大学で教えを受けたゼミ卒業生らの寄稿を中心とした論集である。そのなかには本会会員も数多く含まれている。先生が 7 年間 (2010~2017 年) に渡って館長を務められた道立北方民族博物館に編集委員会が置かれ、同館学芸員も執筆や編集にあっている。書籍の性格上、一般の流通ルートには乗らない見込みだが、同館ショップで取り扱われている。

2 部に分けられ、I 部として 26 件の寄稿、II 部には先生ご自身の文章がまとめられている。後者は、ご自身の研究の歩みについて主要論文・著作をあげながらふりかえった文章と、北方民族博物館友の会季刊誌に連載された巻頭エッセイからなる。全体の構成は以下のとおり。



記念論集に寄せて (大塚初重)

I 部

北米初期移住集団仮説の検証—種状剝離技術中心主義に対する問題提起 (平澤悠) / 朝鮮三国時代の鉄鏃様相と高句麗南進 (服部敬史) / 気候変動から見た 5 世紀から 10 世紀の「北海道」(宮塚義人) / 寛政元(1789)年メナシのアイヌ集落と番屋そしてチャシ (梶田光明) / 明治時代中頃の北海道における考古・人類学に関する研究活動 (秋山洋司) / 亦稚貝塚が造った利尻町立博物館 (西谷榮治) / カムチャツカ先住民社会における伝統文化—とくに狩猟と関連事項についての検討 (渡部裕) / 犬ぞりの動力源としてのイヌ: 行動操作の技術 (中田篤) / イヌイットのディスクナンバー (笹倉いる美) / 埋め込まれた物語: カナダ先住民北トゥショーニにおける彫刻と物語 (野口泰弥) / 北方民族博物館の見学を通して学生が得たもの (佐々木邦子) / 日本におけるチベット語の継承: その過程、現状と多様な意味付け (三谷純子) / 中国朝鮮族の食文化—変わるものと変わらないもの (小坂みゆき) / 集安の思い出—29 年前の日本 (服部久美) / 博物館というものの発見—日本の博物館前史 (矢島國雄) / "DEACCESSION"について考えよう! (水崎禎) / 夜間中学で学ぶ人々に対する社会的包摂としての支援 (佐々木邦子) / 小さな神社に奉仕して (久保昇) / 伝統工芸品としての織物の現状: 山陰の絣と各地の織物の事例から (塩谷もも) / お米を食べよう (鶴岡智美) / アロマ空間研究ノート 1: 「香り」で創る快適空間 (工藤洋子) / 札幌のバー 浪漫風—人は何故、バーで酒を飲むのか (渡辺亜実) / 北

海道における「でんぶんかき」について（朝倉朋美）／日本の民話にみる人と動物の関係比較（東日本編）（柏野恵里子）／出会いから 50 年（梶田美枝子）／岡田淳子先生との楽しい思い出（落合直子）

Ⅱ部

岡田淳子 88 年の小径（岡田淳子）／女の FOUR SEASONS（岡田淳子）

I 部に並んだ標題だけからでも実に多様な題材が扱われていることが見て取れる。それはとりもなおさず、岡田先生のご関心の広さと懐の深さ、教育者として慕われるお人柄を反映しているのだろう。試みに分野別に分類してみると、全 26 件のうち、8 件が考古学、14 件が文化人類学的観点、残り 4 件が博物館学にかかわるものと言えよう。また内容・形式や長さ等の点で、論文 14 件、研究ノートのもの 6 件、思い出の記その他など 6 件、とひとまず分けることができるが、もとより本稿筆者の主観を交えた暫定的区分でしかない。ちなみに本書での配列に基準めいたものを見出すことはむずかしいが、編集委員会のお一人に確認したところ、考古学、北方民族、海外、日本、エッセイといった、大まかな分け方になっているとのこと。つまり、分野と地域、形式を折衷した、多分に便宜的な並べ方になっているのだが、読者にはその配列意図が見えにくい。とくに、学術的な文章と個人的なエッセイ（もちろんそれも祝賀出版にはあってよい）が混在している感をまぬがれないことが、この種の論集には避けがたい「寄せ集め」的な印象をやや強めていると言えなくもない。たとえば、いくつかの章に分けて同趣旨の文章を章別にまとめるだけでも、多少印象は違ったのではないか。実際には多種多様な文章を一定の基準で分類配列する作業が容易ではないことは十分理解できる。たとえば、あらかじめいくつかの区分の枠を設けて、投稿依頼・呼びかけの段階で自己申告してもらう、というのも一つのやり方だったかもしれない。

いずれにしても、本書の企画・編集には敬意を表したい。短期間での原稿集めと大部に渡る困難な編集作業だったことが予想されるにもかかわらず、目につく不備も少なく、祝賀出版として遜色のない、一貫して整った体裁に仕上がっている。何よりも、寄稿されたどの 1 編からも、先生への尊敬と感謝、祝意を読み取ることができる。

本書にかかわったすべての方々とともに、岡田先生のますますのご健康をお祈りします。

（つまがり・としろう／北海道立北方民族博物館）